大正新教育 学級・学校経営 重要文献選

推薦 天笠 茂・佐藤 学

編集・解説 橋本美保・遠座知恵

全Ⅱ期 全10巻

2020年5月 ついに完結 !!

揃定価――揃本体価 **180,000** 円＋税
体　裁――Ａ５判・上製・布クロス装
総約 3400 頁〔各巻約 340 頁〕

第Ⅰ期　高等師範学校附属小学校における学級・学校経営〔解説：第６巻収録〕		
第１回配本・第１～３巻	本体価 **54,000** 円＋税（2019 年７月刊行）	ISBN978-4-8350-8283-7
第２回配本・第４～６巻	本体価 **54,000** 円＋税（2019 年 12 月刊行）	ISBN978-4-8350-8287-5
第Ⅱ期　師範学校附属小学校・公立校・私立校における学級・学校経営〔解説：第 10 巻収録〕		
第３回配本・第７～ 10 巻	本体価 **72,000** 円＋税（2020 年５月刊行）	ISBN978-4-8350-8291-2

※ 価格・配本・構成等は変更となる場合がございます。

お薦め先　カリキュラム、学級経営、学校経営、教育史、教育哲学等の研究者、学生など。
教職課程センター、大学・公共図書館。

■ 本選集には佐藤隆徳が主筆となった『学校・学級経営の実際』（南光社）や『学校経営』（第一出版協会）はじめ、『学校教育』『学習研究』『自由教育研究』等多数の教育雑誌掲載論考を収録した。

幼児教育資料アーカイブ１

復刻版 関西連合保育会雜誌

好評シリーズ第１弾！

解　説―― **湯川嘉津美**　　全２巻
資料協力― **大阪市立愛珠幼稚園・大阪市教育センター**
定　価―― 揃本体価 36,000円＋税　ISBN 978-4-8350-8311-7
体　裁―― B5判・上製・布クロス装・総約1,000頁

戦前期の保育界をリードし続けた、大阪、京都、神戸、岡山、名古屋など各地の保育会における現場の保育者の実情を詳述！　『京阪神連合保育会雜誌』を改題した『関西連合保育会雜誌』（1928-51年）を可能な限り全収録。ほかに『幼稚園に於ける郷土教育』（大阪）『関西連合保育会提出遊戯』（神戸）等の周辺資料も網羅する幼児教育・保育の必見資料群がついに復刻！

●収録内容

Ⅰ　関西連合保育会雜誌
『関西連合保育会雜誌』51-55号（1928年8月～ 38年８月、全５号収録）
『第四十九回 関西連合保育会誌』（1947年）
『第五十五回 関西連合保育大会協議会誌』（1951年）

Ⅱ　関西連合保育会関連資料
『幼稚園に於ける郷土教育』大阪市保育会（1933年）
『第四十回 関西連合保育会提出遊戯』京都市保育会（同）
『関西連合保育大会提出遊戯』吉備保育会（同）
『関西連合保育会提出遊戯』神戸市保育会（同）
『第六回全国幼稚園関係者大会　提出問題意見発表』大阪市保育会（1935年）

戦後の教育改革で生まれた、「新しい教育」とはなにか？

戦後改革期 文部省実験学校 資料集成

全Ⅲ期・全19巻

編集・解題―― **水原克敏**（早稲田大学特任教授）
体　裁――― A4・B5判／上製／総約10562頁

終戦後の教育改革期における実験学校での研究は、その後の初等教育のあり方を見極めるための重要な試みだった――。本資料集成では、1951年以前の文部省報告書を中心に、コア・カリキュラム、広域・複合・総合・教科など、さまざまなカリキュラム実験の実態を伝える調査、報告書類を網羅的に収録。戦前、戦後のカリキュラムの接続と断絶、その後の展開を知るための必備資料である。

- ● 第Ⅰ期 ● 東京高師（東京教育大）附小、東京学芸大師範学校附小（第１～３巻）それに千葉師範、長野師範、奈良女高師の附小における紀要、報告書類を網羅。
- ● 第Ⅱ期 ● 経験主義から系統主義教育への転換過程がわかる、「初等教育実験学校研究資料」（1952-61）及び1954、55年の「初等教育実験学校研究発表要綱」を収める。
- ● 第Ⅲ期 ● 道徳教育、特別教育活動の設定、カリキュラムの能率化の過程がうかがえる「初等教育実験学校報告書」1-12（1961-65）を復刻。

● 第Ⅰ期 全９巻	
第１回配本 第１～３巻	●本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-7803-8
第２回配本 第４～６巻	●本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-7807-6
第３回配本 第７～９巻	●本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-7811-3
● 第Ⅱ期 全６巻	
第１回配本 第１～３巻	●本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-8042-0
第２回配本 第４～６巻	●本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-8046-8
● 第Ⅲ期 全３巻	
	●本体75,000円＋税 ISBN978-4-8350-8202-8

表示価格はすべて税別

不二出版
〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5981-6704
FAX 03-5981-6705
振替 00160-2-94084

CURRICULUM

大正新教育 学級・学校経営 重要文献選

［推薦］
天笠 茂・佐藤 学

編集・解説 橋本美保・遠座知恵

全Ⅱ期・全10巻
2020年5月
ついに完結 !!

MANAGEMENT

日本におけるカリキュラム・マネジメントとはなにか？

大正新教育運動の担い手、「実際家」こそが、理論と実践という二項対立を経験し、葛藤し、その図式を乗り越える論理や方途を真剣に模索していたのではないだろうか？

「児童の数学的な眼を自然や活社会に向けさせ」「数学的な気分を全校に漲らせるため」の実習週間で、弁当持参で呉羽山を測定する児童たち。
「ホーム組織」によって学校の社会化をはかる富山師範附属小の実践の記録（『ホーム組織の学校経営』第８巻収録）。

48点の論考、著作のエッセンスを、大正新教育における「学級経営」「学校経営」という視点から精選・復刻する、はじめての試み！

不二出版

大正新教育 学級・学校経営重要文献選
刊行にあたって

橋本美保・遠座知恵

現在、「カリキュラム・マネジメント」という用語を用いて議論されている教育改革の実現のためには、教師の実践改革へのモチベーションや力量をどのように形成していくのかが課題となっている。2015年に出された中央教育審議会の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、主体的に学ぶ教員の育成のために協働的な学校組織で校内研修を充実させることが求められており、それを担う校長のリーダーシップが強調されるようになった。しかし、こうした問題は今日だけのことではなく、近代以降日本の教育改革が叫ばれる度にくりかえし論じられてきた。とりわけ、大正・昭和初期における一連の教育改造運動、いわゆる大正新教育（大正自由教育とも呼ばれる）は「アクティブ・ラーニング」の源流ともいえる理念と方法を含みもつ、草の根的な実践改革運動として評価されている。当時の教育界では「学校経営」や「学級経営」という言葉が流行し、その主体としての校長や教師の力量形成がさかんに論じられていた。

「学校経営」や「学級経営」の原語である“school management”や“classroom management”は近代学校が成立した明治期に日本に流入していたが、その意味合いは大正新教育期に変化した。それは、こうした言葉を用いて実践改革を称揚するようになったのが「実際家」たちだったからである。当時、自ら「実際家」（あるいは「実際教育家」）を名乗った人たちの中には、小学校の訓導や校長だけでなく、中学校や師範学校の教員、高等師範学校の教授や私立学校の設置者など、多彩な顔ぶれがみられる。彼らは、「理論家」に対抗意識を有していたとみられ、自身は「教育実際界」の人間であることを強調している。明治後期にはヘルバルト教育学の輸入によって成立した「教育学」が普及するとともに、教育界には「理論と実際」に関わるさまざまな二項対立、たとえば学知／生活、言葉／経験、能動／受動、主体／客体、個人／社会、といった問題が認識されるようになっていた。こうした図式は現在に至るまで教育を語る枠組みとして論じられているが、むしろ大正新教育運動の担い手たち、「実際家」こそが、この二項対立を経験し、葛藤し、その図式を乗り越える論理や方途を真剣に模索していたのではないだろうか。彼らが目指したのは「実際教育」の質を高めることであり、そのためには「理論」を実際に適用するだけでなく、「教育の事実」から学ぶ必要があった。彼らは「実際家」としての使命感をもち、それぞれが置かれた場で「教育の事実」に基づく研究に踏み出していたのである。こうした認識や試みを「実際家」ならではの視点や領域として彼ら自身が表現した言葉が「学校経営」や「学級経営」であったといえよう。

大正新教育期の「学校経営」や「学級経営」の概念は多様であり、その取り組みには教科の枠組みを超えたカリキュラム改造、評価の視点を取り入れた児童研究、教師の能力形成を意図した研究態勢の整備、ミドルリーダーやスクールリーダーのためのリーダーシップ論など、現在議論されている教育改革の視点や方法が内包されている。実践の質向上の要となる教師の力量形成を、規範の改変やモデルの提示にとどまらず、学校を基盤として進める方法や課題を探るためには、大正新教育の多様な実践改革は格好の事例といえるだろう。当時、国家主義的な教育政策の下で「教える機械」であることを強いられた教師たちが、「学校経営」や「学級経営」を唱導し、自らの実践を変えようとしたのはなぜなのか。重要なことは、「実際家」たちが「学校経営」や「学級経営」といった概念を用いて、彼らの実践を相対化していったプロセスに注目することであろう。「実際家」たちの個別具体的な課題解決の過程には、今日の我々にも有益な示唆を与える「カリキュラム・マネジメント」のエッセンスをみることができる。彼らの取り組みの記録が、時代を超えて求められている「教師の成長」のプロセスと、それを促す条件（環境）の解明につながり、現代の子どもたちの学びの質の向上に資することを願っている。

（はしもと みほ・東京学芸大学教育学部教授）
（えんざ ちえ・東京学芸大学教育学部准教授）

時代を超えて求められる「教師の成長」のプロセス、その条件とは——大正期のカリキュラム・マネジメントの実践をいまに活かす

大正時代の教育に学級・学校経営から迫る

天笠 茂

15年という短い期間であった大正時代。しかし、その時代に生を受けた人々の人生は過酷であったといわざるをえない。戦争の時代に生き、さらに戦後復興から経済大国への担い手として、加えて、団塊の世代を産み育てた人々の多くも大正世代であり、その人生の軌跡は、わが国の近現代史の核となる部分と重なる。この激動の時代を生きた人々を育てた大正時代の教育とはどのようなものであったのか。その人生を支えたバックボーンはどのようなものであり、いかに形成されたのか。

大正時代の教育を対象にした研究は、すでに様々に存在するものの、まだまだ明らかにすべき課題も少なくない。大正の時代に生きた教師は、それぞれの教室において、また学校において、いかに子ども達と向き合い、何を思い、どのような教育実践を展開したのか。改めて、大正時代の教育がいかなるものであったのか関心は尽きない。

今では当たり前に受け入れられている学級・学校経営という言葉も使われ始めたのは、この時代からである。学級・学校経営にとって大正時代は揺籃期であった。とりわけ学級経営については一気に開花期へと駆け上がっていく時期でもあった。教室において展開される学級経営が、それぞれの学校を単位とする学校経営が、大正新教育の源泉であった。しかも、これら教室や学校における教育実践や、それをもとにした主張の多くが、その後、大正時代の教育の良質の部分とされ遺産として引き継がれ、戦後の教育を支えていくことになった。

改めて、学級・学校経営からとらえられる大正時代の教育とは、どのようなものであったか。これら課題に分け入っていくにあたり、『大正新教育 学級・学校経営重要文献選』は格好の道標となるに相違ない。

（あまがさ しげる・千葉大学教育学部特任教授）

教室において展開される学級経営が、それぞれの学校を単位とする学校経営が、大正新教育の源泉であった——天笠 茂

学校革新の源泉を提示する「財産目録」

佐藤　学

大正自由教育の教育実践は、日本の学校と学級のシステムと文化を一新する歴史的事件であった。その革新性は画期的であり、戦後新教育のモデルとなり、現在のアクティブ・ラーニングの教育革新の起源でもある。この「もう一つの近代化」の教育革新は、大正デモクラシーという社会思潮を背景とし、国際新教育連盟（International New Education Fellowship, NEF, 1921年創設）を媒介として欧米諸国の新教育運動との交流によって実現していた。事実、大正自由教育における授業と学校と学級の改革のいくつかの実践は、世界トップ水準に達していた。この時期の学校と学級の改革は、ファシズム教育によって変質と衰退の不運に見舞われるが、今日に至る日本の優れた学校文化と教師文化の源泉として息づいている。その偉業を現代の視点で創造的・批判的に検証する意味は大きい。

本選集に収録された重要文献は、いずれも私たちが一見すべき珠玉の「財産目録」である。日本の教育が歴史的転換点を迎えている今日、私たちは、もう一度、先達の教育革新の源泉へと立ち戻って現在を見つめなおす必要がある。本選集は、その格好の資料群を提示している。

（さとう まなぶ
学習院大学特任教授・元日本教育学会会長）

本選集に収録された重要文献は、いずれも私たちが一見すべき珠玉の「財産目録」である——佐藤 学

大正新教育 学校・学級経営 重要文献選　収録内容一覧

●この選集の特色●

❶ 今日のカリキュラム・マネジメントを考え、当時の教育者、実践家たちの理想と実践を理解するために欠かせない、**大正新教育**における**学級経営**、**学校経営**の重要な文献・論考を精選する、はじめての文献・論文選集！

❷「学級経営」の言葉を最初期に用いた澤正『**学級経営**』（1912）はもちろん、**及川平治**や**西山哲治**をはじめ、**北澤種一**、**木下竹次**、**野村芳兵衛**、**齋藤諸平**、**赤井米吉**など当時の教育者、「実際家」たちの多様な論考、約48点を収録！

❸ 本選集は、東京高師附小、東京女高師附小、奈良女高師附小を中心とする**第Ⅰ期「高等師範学校附属小学校における学級･学校経営」**（第１～６巻）、さらにその他の師範学校附属小学校、公立校、私立校における論考を収録する、**第Ⅱ期「師範学校附属小学校・公立校・私立校における学級・学校経営」**（第７～10巻）からなる。各校の実践の全体像を把握しやすいように構成された本選集によって、現在の学級、学校経営を変革するためのさまざまな知見が得られるだろう。

❹ 収録文献・論考の編者による解説は「第Ⅰ期 解説」として、「学級･学校経営のはじまり」（橋本）、「高等師範学校における学級・学校経営」（遠座）を第６巻に、「第Ⅱ期 解説」として、「府県立師範学校附属小学校における学級・学校経営」（橋本）、「公立小学校における学級・学校経営」（遠座）、「私立学校における学級・学校経営」（橋本）を第10巻に収録。各校における取り組みと特色が浮き彫りに！

第Ⅰ期　高等師範学校附属小学校における学級・学校経営

第１回配本・全３巻

1 東京女子高等師範学校附属小学校 1

学級経営原論
北澤種一 ◎ 東洋図書／ 1927
欧米視察を終えた北澤は、教師が「学級の経営者として…よく学級教育の任務を果た」していることに驚愕、その長を採るべく本書を編んだという。序章から学級担任者の役割を確認、作業と学習、生活との関わりを説く第６章までを収録。

学校経営原論
北澤種一 ◎ 東洋図書／ 1931
『学級経営原論』の「母体」とされた本書は北澤の「学校経営論」を概説。とくに苦心したという、「自己活動者」としての校長を描いた「第２章 校長観」から「第５章 作業学校」までを採る。

2 東京女子高等師範学校附属小学校 2

低学年教育原理と尋一・二の学級経営
坂本豊 ◎ 目黒書店／ 1928
北澤のもとで尋常科一、二年の指導に従事していた坂本は、低学年教育の原理から教育方法、各教科から図画、手工、唱歌を網羅、学級経営の課題と当時の実態を詳述する。

3 東京高等師範学校附属小学校 1

自学中心学級経営の新研究
小林佐源治 ◎ 目黒書店／ 1925
自身も系統だった教育を受けなかったという小林は、その経験から「自学中心」の重要さを強調する。本巻には、これまでの教育と新教育との比較を論ずる第３章まで、さらに「第６章 環境」と尋常科一年生から六年生までの各論も収録。

学校経営新研究
小林佐源治 ◎ 目黒書店／ 1929
「学校経営は（…）形式的常識的なものでは本当の教育は出来ません」という小林。学校経営全般に関する箇所に加えて、「児童図書館」「個性調査」「職業指導」「成績考査」を収める。

第２回配本・全３巻

4 東京高等師範学校附属小学校 2／広島高等師範学校附属小学校

生活指導学級経営の理想と実際
鹿児島登左 ◎ 明治図書　1928
東京高師で北澤、小林らとともに指導にあたった鹿児島の主著。学級の意義を確認したうえで、学級経営と学校経営との関係を論ずる。本巻では各科事例、事務、設備関連部分は削除した。

学級論
佐藤熊治郎 ◎『学校教育』175-181号／ 1928
広島高師で教鞭をとっていた佐藤が『学校教育』に連載した学級経営に関する論考。未完だが、佐藤の教育観を知る貴重な論考である。

5 奈良女子高等師範学校附属小学校 1

学習法実施と各学年の学級経営
清水甚吾 ◎ 東洋図書／ 1925
木下竹次が主導した「学習法」「合科学習」を忠実に実践した清水の代表作。自身が理想とする個性的な学級を意味する「学級王国」という言葉は、今日なお生きている。収録は「前編 学習法と学級経営法」まで。

続　学習法実施と各学年の学級経営
清水甚吾 ◎ 東洋図書／ 1928
続編からは、「新時代に於ける訓練の改造」はじめとする「訓練」に関する第７～ 11章までを収録。「昭和」における清水の立ち位置とは？

6 奈良女子高等師範学校附属小学校 2

学校経営の概観
木下竹次 ◎『学習研究』２巻４号／ 1923
奈良女子高等師範附小を主導し、全国の新教育運動に大きな影響を与えた木下の、『学習研究』掲載の関連論考を精選して収録。本稿は学校経営論を文明論とともに展開。

学校進動の原理（学校経営論）
木下竹次 ◎『学習研究』２巻５-７号／ 1923
本論で木下は、学校をひとつの生命体とみなし、その成長発展には必ず「学校進動の原理」があるとし、その法則を学校の構成員が自覚することこそが必要と論ずる。

学校の経済的活動
木下竹次 ◎『学習研究』２巻９号 - ３巻２号／ 1923-24
「第八 労力経済」では、労力の意義、その増大法、節約法、増進法を展開し、合科教育との関連を説明、学校における経済活動の意味を検討する。

「新学級経営号」（『学習研究』3巻4号より）
木下竹次 ほか／ 1924
木下の**「学級経営汎論」**をはじめとして、奈良女高師の訓導らの論考を一挙に収録。**鶴居滋一「合科学習に於ける学級経営と其の功過」／清水甚吾「学習法の実施と学級経営」／山路兵一「学級経営案と学級経営」など**。奈良女高師の全体像がわかる。

学級経営苦
池内房吉 ◎『学校・学級経営の実際』２巻６号／ 1927
「学級経営は苦しい、決して楽なものではない」ではじまる本論では、低学年の学級経営の労苦を知るがゆえに、あえて「児童に対する要求は低いほどよい」と言い切る池内の苦悩がよく表れている。

父母としての教室生活
池田小菊 ◎ 厚生閣書店／ 1929
木下のもとに学び、児童の村へと移った池田は自身、「父母としての愛」を教室に実現しようとした。本巻では、その理念と方法を概説する序から「教育の方法に就いて」までを収録。

第Ⅱ期　師範学校附属小学校・公立校・私立校における学級・学校経営

第３回配本

7 茨城女子師範学校附属小学校

学級経営
澤正 ◎ 弘道館／ 1912
明治最後の年に刊行された本書は、「教育とする」学級経営を唱導、単式学級に基めざした。大正新教育における学級経営き著書。

8 富山県師範学校附属小学校・東京府女子師範学校附属小学校・明石女子師範学校附属小学校 ほか

ホーム組織の学校経営
富山県師範学校附属小学校 ◎ 東洋図書／ 1927
「学校の社会化」を志向する富山県師範学校３年以上に縦割りの「ホーム組織」を形成、本巻は第３章「体育」を除くすべてを収録。

低学年より高学年への発展的学級経営
守屋貫秀 ◎ 郁文書院／ 1930
「発展的学級経営」を掲げた本書からは、守とめた第１編と「第２編 低学年の学級経営

個人教育と級別教育との調和　学級組織の改造
及川平治 ◎『教育実験界』21巻９-11号／ 1908
大正新教育の先鞭を切った及川平治が、欧咀嚼したうえで日本の実情に敷衍した貴重本論では「児童は穀物の如く一斉に生長する個人に適切な学級を編成する必要を説く。

欧米諸国に行わるゝ学級革新十五大案
及川平治 ◎『教育実験界』25巻１号／ 1910
「日本全国教育者諸君！余は現行小学校の を絶叫す。現行学級教育を根本的に破壊 及川は「ジッキングル案」など「学級教育」 欧米の議論を現場で生かす方途を探った。

将来の学級教育
及川平治 ◎『教育実験界』29巻３号／ 1912
「今の教育は研究法を欠く」とする及川は、知 教育よりは、「知能を収得する方法」を授け を会得させるための「学習法の教授法」こそ

「学校経営号」（『自由教育研究』１巻４号より）
手塚岸衛 ほか／ 1926
千葉師範附小をリードした手塚による「小学 になったわけ」はじめ、同校の訓導らの論 は以下：**香取良範「尋一の学級経営」／青 営（尋常二年生）」／川崎泰治「尋三学級経 ことの断片」／佐久間治八「尋四女生を受持 の学級経営（尋五男）」／木島政一「高女の ／高木金次郎「学級経営と机の配列」／水 自戒」など**。

9 公立校 ── 田島小学校・神興小学校・三国小学校・倉敷小学校 ほか

公立学校研究学校　学級学校経営の研究
山崎博、入澤宗寿 ◎ 明治図書／ 1929
田島小学校の「体験教育」を理論的に導い 崎による同校の実践成果を詳述。収録は「 論ずる第５編まで。田島小の取り組みを体 できる。

私の学級経営と其の伸展
安部清美 ◎ 教育公論社／ 1927
福岡県の神興小学校において、独特のイン と「子供を活かすため」の教育に従事した 的に児童を見つめよ」と力強く説く第１、２

自発教育に於ける学校経営
三好得恵 ◎『学習研究』３巻２-３号／ 1924
福井県三国小訓導であった三好による。「自 童を自覚にまで導き、断えざる内省により 成に全意志を傾注させる「自発教育」による

新学校経営学
齊藤諸平 ◎『学校経営』２巻１-２号／ 1927
能力別学級編成など、岡山県倉敷小学校 実践報告。欧米視察で学んだ新教育を咀嚼 習時間設置など、ドルトン・プランやプロ 独自にアレンジして実地で試みた事例の数

移動式学級担任制の提唱
齊藤諸平 ◎『学校経営』２巻３号／ 1927
学級担任制と学科担任制の長所を併せも 担任制」を齋藤は推奨。その内容と方法と

新教育の原理に基づく学校組織一班
齊藤諸平 ◎『学校経営』３巻１号／ 1928
「学校組織の根本基調」にはじまり、「教育 理想の現実化」など、齋藤の教育理念が短 パクトに示されている。

私の学校経営
山崎菊次郎 ◎『学習研究』９巻２号／ 1930
本稿は奈良女高師附小での大会記録とその 京、滝野川小の校長として、公立小の制約 流をはかり、協動的な学校づくりを目指した

10 私立校 —— 帝国小学校・成城学園・成蹊学園・児童の村　ほか

私の学校及学級経営法
西山哲治 ◎ 明治図書／ 1927

帝国小学校を創立した西山が、自身の体験を包括的にまとめた１冊。「小学校の経営を質素にせよ」等をテーマにする「第１篇 私の経営体験」ほか、「幼稚園の経営法」も収録。

低学年の学級経営
松本浩記 ◎ 文化書房／ 1927

成城小学校の訓導、松本浩記は、島田正蔵とともに低学年教育を研究、国語を中心とした未分化で遊戯的な授業を試みた。成城小初期の実践を伝える。全頁収録。

尋一の経営について
照井猪一郎 ◎『教育問題研究』47-48号／ 1924

後に赤井米吉とともに明星学園を創設した照井は、成城小学校の訓導として初学年を担当、児童との「協力の下に互に教育的生活を営」むために詳細な児童調査を実施して、学習環境の整備、学習指導の工夫にあたった——。

私の学校の経営
赤井米吉 ◎『学校・学級経営の実際』１巻１号／ 1926

明星学園の学園長として、学校運営の資金、施設、児童数等について、赤井は強い決意とともに赤裸々に記述する。

学校経営の根本原理
小原国芳 ◎『学校経営』２巻２号／ 1927

新計画に対する反省
小原国芳 ◎『学校経営』２巻７号／ 1927

1926年、成城学園を誕生させた小原は、翌年発表されたこれら２本の論考で、「子供のよくなる」を最終目的とした「協力一致の精進」を強く主張。これらの小文は、学園発展への強い意欲にあふれている。

児童の村小学校はどうして経営せられつゝあるか
野口援太郎 ◎『学校・学級経営の実際』１巻２号／ 1926

校長として児童の村を設立した野口が、教育の世紀社の精神を生かして学校運営を具現化していく過程を語る。

新しき学校を経営するの苦心
志垣寛 ◎『学校経営』１巻２号／ 1926

「概ね経済的方面の事」である私学の学校経営以上に、「新教育の精神」を活かして、「学校としてうまくやって行く事」が必要だと志垣はいう。

学級の編成と教員の配置　ハウスシステムについて
志垣寛 ◎『学校経営』２巻３号／ 1927

「ハウスシステムと云ってホーム・システムと云わないのは、校舎教室が一つのハウスでありたい」からだという志垣の、児童の村の実践から生まれた学級編成論。

低学年学級経営の基調
野村芳兵衛 ◎『学校経営』２巻１号／ 1927

「協働自治」の思想に基づいて低学年の学級経営を論ずる野村。「幼い子供への友情の向け方」「子供の活動性」「教師の生活態度」など様々な実践から得られた知見を詳述。

高学年の学級経営
野村芳兵衛 ◎『学校経営』２巻６-12号／ 1927

「学級経営と言うことは、学級生活に於ける児童とそして教師との十全な協力を実現したいと念ずるところの教師の願いであり、その実現のもくろみである」。前出の「低学年…」の続編。「交友の指導」「内省の指導」など副題に沿って展開される。

人情より学級編成制度を考ふ
野村芳兵衛 ◎『学校経営』２巻３号／ 1927

児童の村時代の野村の学級経営論。「私は学科担任ではたまらないのです（…）どこまでも学級担任でありたい」とする野村は、あくまで学級担任こそが学校の本体と主張する。

新校長論
野村芳兵衛 ◎『学校経営』３巻１、４号／ 1928

本巻収録の「新校長論」は、（二）を確認することができなかったため、（一）（三）のみを収録した。校長になったことがないとする野村の、「新校長論」。

支配より自治へ　校長意識の更新
上田庄三郎 ◎『学校経営』３巻３号／ 1928

高知の小学校校長を辞し、生活綴方運動に参加すべく上京。その後、雲雀ヶ丘児童の村小学校の校長となった上田による「新時代のタクトたらう」とした「校長論」。

学校無校長論学級無主任論
千葉命吉 ◎『学校経営』３巻５号／ 1928

奈良女高師附小、広島師範附小を経た千葉は「独創教育」や「一切衝動皆満足の教育」を主張。ここでは校長も主任も無用とラディカルに主張する千葉の「理想案」を収録。

自由ヶ丘学園の建設
手塚岸衛 ◎『学校・学級経営の実際』３巻５号／ 1928

「自由教育」の論者として賛否両論を巻き起こした手塚は、1928年に念願の私学・自由ヶ丘学園を創立。設立の動機、経過と将来の計画を述べる本論からは、新学校創設にあたっての手塚の意気込みが伝わってくる。

自由ヶ丘学園の経営
手塚岸衛 ◎『学校・学級経営の実際』４巻２号／ 1929

新教育を理想主義的な自由教育論で終わらせぬため、手塚は自由ヶ丘学園を「自由教育主義の研究所」として、公立校においても実施可能な改革を提起しようと試みた。児童の「協同自学を中心とする」ための具体例も紹介する。

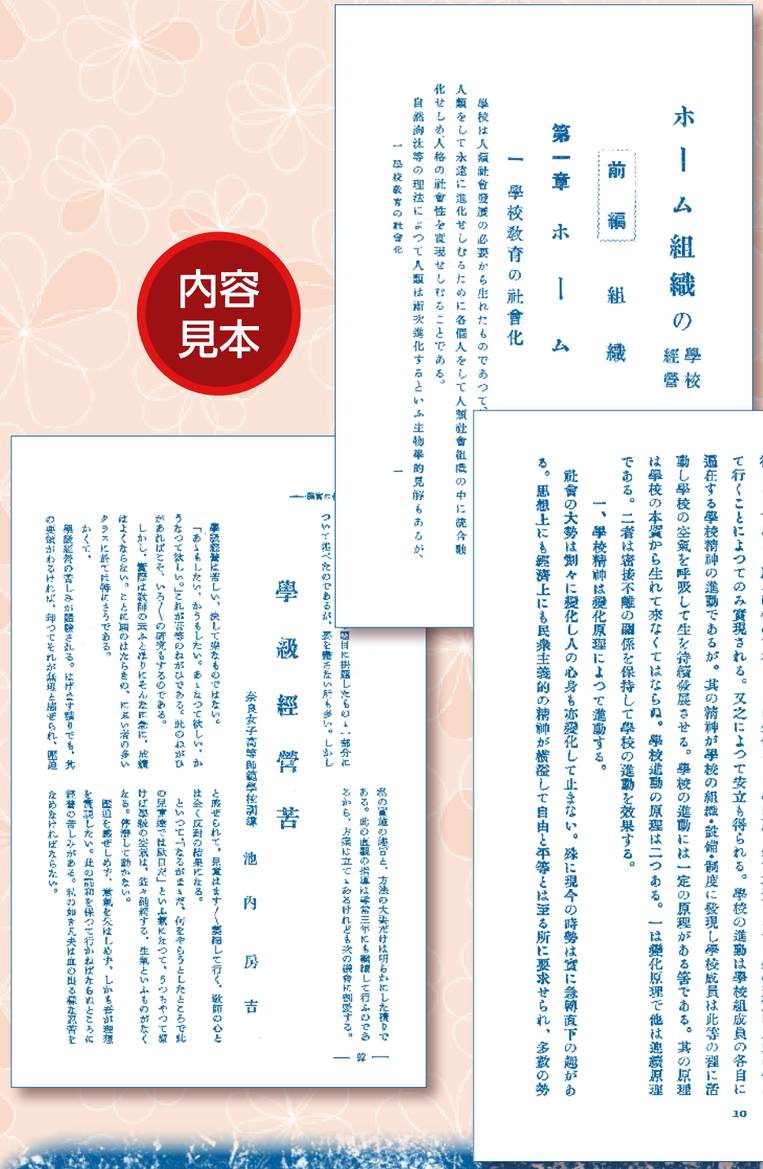
成蹊学園の教育精神と実際
野瀬寛顕 ◎『学校・学級経営の実際』４巻２号／ 1929

1926年に成蹊小学校に赴任した野瀬は、「学習の行為化」を提唱。中村春二の影響を受けた野瀬は、「成蹊教育」の精神においては、学校経営も学級経営も同一であると喝破する。

私立幼稚園の経営
和田実 ◎『学校・学級経営の実際』４巻９号／ 1929

大正新教育期の保育界における重要な実践家である和田は、幼稚園教育を「全国の津々浦々迄も普及」させるため、その経営を「私人の経営に委して、最も簡易な方法で実現」することを奨励。『幼児の教育』（1926）初出時からの変更も興味深い。

内容見本



ホーム組織の學校經營

前編　組織

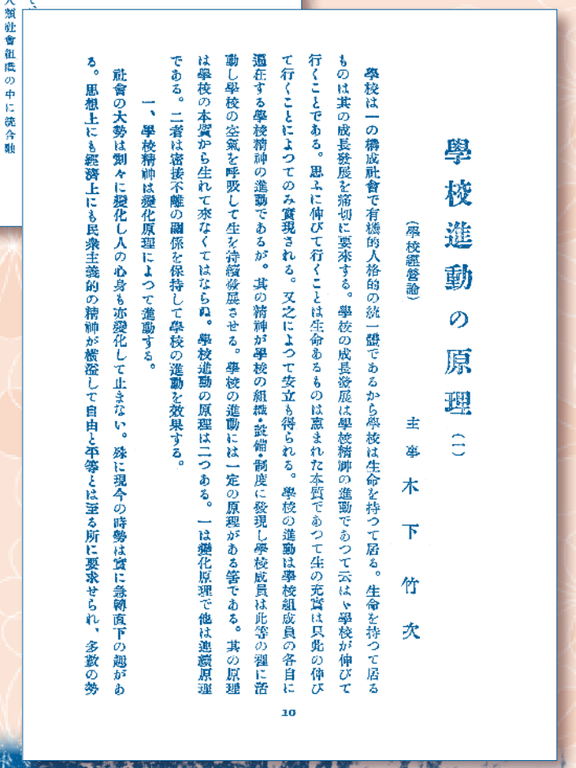
第一章　ホーム

一　學校教育の社會化

學校は人類社會發展の必要から生れたものであつて、人類をして永遠に進化せしむるために各個人をして人類社會組織の中に統合融化せしめ人格の社會性を實現せしむることである。

自然淘汰等の理法によつて人類は漸次進化するといふ生物學的見解もあるが、

一　學校教育の社會化



學校進動の原理（一）

（學校經營論）

主事　木下竹次

學校は一の構成社會で有機的人格的の統一體であるから學校は生命を持つて居る。生命を持つて居るものは其の成長發展を締切に要求する。學校の成長發展は學校精神の進動であつて云はゝ學校が伸びて行くことである。思ふに伸びて行くことは生命あるものは惹まれた本質であつて生の充實は只此の伸びて行くことによつてのみ實現される。又之によつて安立し得られる。學校の進動は學校組織成員の各自に遍在する學校精神の進動であるが。其の精神が學校の組織・設備制度に發現し學校成員は此等の彌に活動し學校の空氣を呼吸して生を待續發展させる。學校の進動には一定の原理がある筈である。其の原理は學校の本質から生れて來なくてはならぬ。學校進動の原理は二つある。一は變化原理で他は連續原理である。二者は密接不離の關係を保持して學校の進動を效果する。

一、學校精神は變化原理によつて進動する。

社會の大勢は刻々に變化し人の心身も亦變化して止まない。殊に現今の時勢は實に急轉直下の趨がある。思想上にも經濟上にも民衆主義的の精神が橫溢して自由と平等とは至る所に要求せられ、多數の勢

10

學級經營苦

奈良女子高等師範學校訓導　池内房吉

學級經營に苦しい、淋しい、決して樂なものではない。

「あゝもしたい、かうもしたい。あゝなつて欲しい、かうなつて欲しい。」これが苦のねがひである。此のねがひがあればこそ、いろ〳〵の研究をするのである。

しかし、實際は教師の思ふと通りにそんなに急に、成績はよくならない。と此頃のはたらきの、に思い苦の多いタクヤに於て此時とさうである。

學級經營の苦しみが體驗されるのでも、其の樂味がわるければ、苦つてそれが孤獨と感ぜられ、圓滑

■ 左から、池内房吉「学級経営苦」［第６巻収録］、富山師範学校附小『ホーム組織の学校経営』［第８巻収録］、木下竹次「学校進動の原理」［第６巻収録］冒頭部分。
「学校は一の構成社会で有機的人格的の統一体であるから学校は生命を持って居る」ではじまる木下の視点には、制度的な学校管理とは異なる生き生きとした論理が流れている。

■ 下は齋藤諸平の教育理想の「根本義」。「新教育原理に基づく学校組織一班」［第９巻収録］。

写真：左端写真とも『玉川学園五十年史 写真編』（1980）より。